

秋の暮れ冬の初め、妙子の庭の日當りに海棠が春のまゝの歸り花を、硬ばつた枝につけ、山茶花が一二輪咲き初めた頃、彼は木戸を戀の大敵として受けねばならぬ事を悟つた。妙子の机の抽斗でふと見た水鳥の繪端書には、新三の名があつて、「足に隙なき我が思哉」と書いてあつた。

木戸は悔たのである。得んとならば、一舉手一投足の勞なくして得らるべき戀を、さも弊履の如く捨てたのを悔たのである。一旦は自れに命をかけた女が他人と歡樂するのを見て、自分の戀が眠つて居たかの如く感じ、遽にその女の諸所に美點を發見するのは、木戸一人の事ではない。彼が妙子に依りて、性慾の満足——今は高價に思はる——を得たらば萬事は終つて居たであらうが、それでない以上、彼と妙子との慇懃の度が増せば増した程、木戸の執心は盛に煽られたのである。

戀された男に代つて、戀した女を得る第三者が、その戀された男に對する租税と云つた様なものが、この廿日以前からの苦惱だと彼は考へた。而し斷然たる初念を通し了せぬ附甲斐なき男といふ憎惡の念は激しく胸を衝て、彼は空に向つて唾した。その唾の五色に亂

開業醫(賞)

服部水仙子

「貴君、車がまゐりましたよ」
音聞きつけて妻君は云ふ。がら／＼と曳き入れた車は玄關の前に止つた。

薄暗い部屋に、暫らくは音もたえず、丁寧に洋服を着替へて居た菊井は、やがて壁にかけた、鏡の前に立つて、襟飾を直し、髪には一度櫛の齒を入れて部屋を出た。

妻君は絹切れで、せつせと長火鉢の縁を拭いて居た。塵を中に、畳み込んで拭き、廣げてはまた畳んで拭く手許を見ながら、其處にあつた赤羅宇の煙管をひきよせて一吹つける。そこへ薬局に居た義弟の太一がはいつて來て。

「あの、仲町の木曾谷から直ぐに來てくれ、來ました」

「ふむ」
疾くに承知とも聞えるやうな返事して、また一吹つけたが、それはすつば／＼と飲んでしまつて立ち上つた。手下げは玄關に出てあつた。犬にかまつて居た車

れるのを見て、日の盛んに照つて居るのを知り、今度元氣よく歩き出した。
或る教會堂の門内から黒の被衣を着た若い尼が出て來た。その白く小さい顔には、平生の内行に一點の批難すべき所もないのを現す如き、安心皎潔の相が見えた。仰ぐと教會堂の高い尖つた屋根の上には、十字が燦爛と金光を放つて居る。

高く空を過ぐる風、遠くで鳴る松の聲、碧い眼で彼を見ながら行く愛らしき異人の子、そして彼を待たむ妙子の面影、胸は何となく柔かになつて、暫し激昂から逃れると、又言ひ知れぬ心細さが襲ふて來る。
戀敵の事や、職業の事に勞れた此廿日餘りの苦惱にも劣らぬ悶えが、妙子にもあるのではないかと考へた。得んと願つて而も得る事の出来なかつた戀が、今は自分の手の達する所にあるのである。その戀は、色香に於て褪せもしつれ、觸れなばなつかしき温さを覺ゆらん戀である。舊き戀に就くにも、新しき戀に殉するにも妙子は悶えの酷に浸からねばならぬ。
山茶花の垣根が見えた。晝の月が青い空に艶もなく出て居る。

夫は氣はひに飛んで來て膝掛けを肩にかけ、門の前には男の子守が、體を左右にふり乍ら、唄を小聲に眺めて居る。筋向ひの宿屋の二階には、肩當ての極目になつた寐卷を着た客が、欄干に手をついて瞰下して居る。

通りがけの病家も一軒、愛相宜く切り揚げて、車は又年暮に忙しい街を走つて居る。電柱に張りつけた賣り出し廣告、赤い圈點も景氣宜く、諸々な出店々々の賑かさ。車夫の呼聲に、慌て、飛び退く人々の顔を頓馬とでも言ひたげに、菊井は即ち傲然と構へて居た。車の歩みが緩くなつた。ふと氣が付くと木曾谷の店先には、美しい、車が一輛止つて居る。

不安の念は、車の背に、小さな三つ柏葉の紋を認めるや否や、激しく胸を打つた。

火鉢を挟んで其處に居た二人の車夫は、梶を下す車夫に笑顔で會釋して、目をそばたて、眺めて居る。悪るびれずに宣告を聞きに往くと云つたやうな心ですつと奥に通ると、そ／＼と出向へた主人が

「お待ち申して居りやした」
と先に立つ。
「やあ」

聲は先づ座つて居た人から掛つた。

「やあ」

「お待ち申しましたさうで……失禮しました」

「いえ、ああ、如何です、お忙しいですか」

「え、なあに、は、は、は」

菊井は苦笑せざるを得なかつた。

「氣心知れぬ先輩を憚る心と、新進の技倆を憚る心と、不安の胸とは、茲に暫時の沈黙を醸した。煙草は絶えず煙りに纏れて居る。主人はやを膝を進めて、

「何ですな……その、手前でもあまり熱が退けやせんので……年寄達が極く氣を揉むもんですから、今日小針先生にも御診察頂いたやうな譯でして……その何ですな、お見立てはどちらも同じものなんでせうか如何

秋のく 都京 小 莞爾



「何ですな……その、手前でもあまり熱が退けやせんので……年寄達が極く氣を揉むもんですから、今日小針先生にも御診察頂いたやうな譯でして……その何ですな、お見立てはどちらも同じものなんでせうか如何

か、その處を一つ……」と頭を掻いて、
「御相談して頂きたいと思ひやして實は、お迎へ申上げたやうな譯なんでした……はい」
「は、あ……さうでしたか」

自分にも此言葉はあまり白々しく響いた。が小針醫學士は頓着せず、

「ああ只今診察しましたがな、褥熱……ばかりでは無いやうに思はれるやうですが、蜂窩織炎の……つまりまあ熱と熱とが衝突したので恁んなに非常な發熱を來したのでせう……随分非常な熱ですな！」

「え、弱ります、恁う續かれちやあ」
溫度表を見て居た菊井ははつと此場合、弱いことを言つた後悔した。同時に不安の念は見る、嫉妬嫌惡の情を包んで、胸に擴がつた。

また一人、患者を奪はる、恐惶である。

町は三月程前に、花々しく故郷に開業した小針醫學士を歓迎した。同情した。日々の患者は、廻診時なる午後にも押かけると云ふ。爲めに、今迄隆盛を擅にして居た郡立病院も、此頃滅切さびれて來たと云つて、人は益々小針醫院に集まつて行く。醫學士の稱號は町の人に、藥のき、目を信ぜられたので。尤も病院長とても學士であつたけれども。

兎に角、近村から此地に出て開業して、郡立病院以外に、可なりの患者をあつかつて居た菊井は、此頃玄關に抜く下駄の數の少なくなつたと共に、病家の一二

軒から、病人かつの斷りを喰つたのであつた。
「ではさういふことにして……頓服を止して解熱劑は常藥にするやうに相談したから、藥はやはり菊井さんの方から……」

「は」

と主人は物足りなさそうな顔、菊井は凝平と其横顔を見詰めて居た。

「兎に角明日また來て診ませう、では失敬します！」

如才の無い取り廻しを、面憎く思ひ乍ら、

「失禮します！」

何氣なく。

家内の者はそれとばかりに送て出る。車夫は待つて居て靴をはかせる。やがて二人曳きは勝ましく馳け出した。

障子の手かけに張り込めた萩の葉を、煙草ふかしながら眺めて居ると、主人はもとの座にかへつた。

「なか／＼如才がありませんなあ」

強ゐられた嘲りの笑は口許にのぼつた。

「はア、なか／＼もつて……」

主人は何とも返事が仕兼ねたらしい。後は咳にまぎらしてしまつた。

暫くまた話が杜絶えたが、菊井はやがて種々と看護上
のことを注意して立ち上つた。はかうとする時になつ
て、娘は慌て、靴を直した。雇ひ車の、さまで世話焼
かすとも宜い理由があるのだから、車夫は店に寝そべ
つて居た。自分で手下びを持つて、態と悠々と肩をあ
げて歩いたが、内心は非常に恥かしかった。
人の世の戦ひの聲は街に騒々しい。亂れた頭脳は矢
庭に興奮して、何處かにひそむ恐怖を勵ますやうに、
「戦はねばならぬ！」
と心に叫んだ。

車は受持ちの遊廓地さして走つて居る。

一 夜

永井 久

私が大患に罹つて止むなく和泉の海岸から歸つて三日目の夕方、此方か
らの通知が行つたので、早速叔父様に来てくれた。
厚い蒲團を二枚重ねて、私は其上に斯う埋もれるやうに、衰弱しきつ
た、瘦せ細つた身體を横へて居る。今先き弟が殊勝にも洋燈を運んで
くれたので、薄暗かつた六疊がバツと輝いた。
目を細めて、沈つた燈を覗めると、花やかな光は眩しい位で、今は病

苦もやんで居るから、自分の身體とは思はれぬ程ぐつたりとして、只知
覺神經だけが僅かに働いてゐると云うやうな心持がする。
時々藥臭が鼻と鼻を衝く、それに交つて、枕元の盆に轉かつてゐ
る林檎が、唾を分泌させる程、好い香りに匂つて来る。
炬燵の温味は好い加減の度を保つて居て、恰で湯の中に居るやうに身體
に傳はる。
ふと、なつかしい叔父の聲が耳に入る。此方へ來られるのか知らと思つ
たが、さうでないらしく、母屋の奥の間で、父母と何をか話してゐられ
るらしい。よくは分らぬが、しんみりとした、そして莊重な語調に響
いて来る。

私は又しても、祖父様の機嫌を損じてゐるのが氣になる。そんな要らぬ
ことの氣遣ひは病氣によくないからと云つて下さる母の親切は有難い
が、如何に明治の少年で、漢法醫が信じられぬがらとて、現在醫者なる
祖父をそつちのけにして、歸る早々他から若手の醫者を招き、今また叔
父様を迎へたことは、何にしてもよくないやり方であつた。——けれど、
私には舊時代の遺物たる漢法醫そのものの力が信ぜられぬのだ。
こんなことを考へて居ると、ふとあちらの話聲が際立つて、強く胸に
響いたので、胸を掻きながら耳を傾けると、
「どうかして、一度はよくしてやりたいけれど……」
母の聲だ！うるみを持つた、胸のせまるやうな聲で、後は咽ばれたらし
い。

私の胸は、實に鋭い驚の爪を持つて、臍臓をかきむしられるやうな心地
がして、がつくり思はず、ブル／＼と總身が慄うた。熱い涙は頬を流れ
る。

母の一語で、話の後前はすべて、私の病氣に關してであつて、最早如何
ともすべからざる運命に據はれて居ることを叔父が宣告したのである
ことが分つた。

私はどうして、平氣で居られやう。

私には父母もある、弟妹もある。大なる抱負や希望もある身ではないか。
あゝ死にたくない！十八やそこいらで死んでたまるものか。私は悶え
て、涙が止度なく出る。

死！私はこれ迄考へたことも無い、死と云ふ絶對の力に面と向つて立
たねばならぬことになつた。のがれられぬ運命の黒い手につかまれたの
だ。そして弱い吾は、此の強い力の爲めに刻々壓迫を受けて居るのだ
——と思ひ至ると、堪へがたい苦悶と恐怖が鼻と胸に突き立つた。

さう思ひながらも、一方では種々の理由の下にそれを打消さう／＼とす
る。母の一語は空耳だ！まだ絶望するには當らぬ、と勝手なことを考へ
て、いくらか安心を得る。

それから間もなく、叔父と、父母と弟とがドカ／＼と入つて來た。私は
とても起きられぬので、眼だけパツチリ開いて、會釈した。

叔父様は母の弟で醫者である。絹物のシユウ／＼音のする着物を着て、
靴を持つて來られた。

「病氣ぢやさうだなあ……」思ひやり深い言葉である。
「……」何も云はずに私はうなづく。
「どうだ、少しは好いか。」

私はまた無言で大きく頷いた。
皆の視線はすべて、私の顔に集つて来る。弟だけは、炬燵へもぐすり込
んで、隅の壁に背を喰付けて、倦れてゐる。平素の腕白者が——と思
うと、今のしほらしさが、つひ涙を誘ふ。

「一度よく診てやつておくれよ。」

と母が叔父様に頼まれる。

「ああ後に……」

と、煙草を吸んで、「まだ腹は膨れないかれ。」と私の方を見られる。

「え、まだ……」彼方で水を排泄して貰つてから七日目です。」

私の聲は存外力なく、嘆れて居て、歴りしなかつた。

「もうどうか溜らないと可いかれえ。」

と、母は心配さうに眉を顰めて、私の方を見られた。私は思はず慄つと
して、和泉で針のやうなものを腹に突き立て、腹水を取つて貰つた時
の苦痛が思ひ出される。身體が痛くなるやうだ。

「ゆつくりと養生すな。」

父は太い聲で、力を付けるやうに云ふ。

「さうさ、氣長にやらなきや、そして第一滋養物を吸収する必要があ
る……さうだ固形物はよくない。」